様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５２８

研究課題名（和文）フランス近代文学における非人間の詩学

研究課題名（英文）Poetics of the inhuman in Modern French Literature

研究代表者
塚本　昌則（Masanori, Tsukamoto）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：９０２４２０８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　近代フランス文学では、とりわけ詩の分野で、詩人不在という現象が明確になってゆく。ランボーの「私とは一個の他者だ」という言葉が典型的に示しているように、抒情の言葉がもはや実在する人物の心情から発生するのではなく、非人格化の過程で模索されるようになるのだ。この作者と言葉の分離という現象は、散文詩というジャンルを生みだしただけでなく、ヴァレリー、カミュ、クロード・シモン等、二十世紀の作家たちの散文にも広く見られる。本研究では、フランス近代の散文に見られる非人間化という現象を、歴史的背景をふくめた広い視点から検討することを目指す。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　二十世紀の芸術家たちには、作品をほとんど全面的に人間的事実のフィクションから構成するという、十九世紀の写実主義の方法への反発が広汎に見てとれる。この非人間の詩学が、文学においてどのように現れているのかという問題はまだ十分に解明されていない。例えば〈声〉という現象には個人を超える広がりがあり、個人のものとは感じられない、録音された声や内なる声など、声の諸相は文学の大きな主題となっている。また、夢と覚醒という、個人のなかで人格の意識がゆらぐ状態も、さまざまな作家、詩人、思想家によって扱われている。これらのテクストの読解を通して、二十世紀文学のあり方を再考することを本研究では目指した。

研究成果の概要（英文）：In modern French literature, especially in the field of poetry, the phenomenon of the poet's absence becomes clearer. As Rimbaud's word "I am an other" typically indicates, words of lyricism are no longer generated from the feelings of a real person but are sought in the process of depersonalization. This phenomenon of author-word separation produced not only a new genre of prose poetry, but also it is widely seen in the prose writers of the twentieth century, such as Valery, Camus, Claude Simon, etc. In this study, we aim to study the phenomenon of dehumanization that is found in the prose of modern French literature, from a broad perspective including the historical background.

研究分野：フランス近代文学

キーワード：フランス近代文学　散文　非人間　声のテクノロジー　夢と覚醒　制作学

１．研究開始当初の背景

一九二五年、オルテガ･イ･ガセットが、同時代に現れた芸術の傾向は非人間化にあると看破している（オルテガ「芸術の非人間化」）。オルテガによれば、生きものの形象を排除する、芸術を遊戯以外の何物でもないとみなす等の新芸術の傾向には、非人間化という特質が現れている。この非人間化の過程を、ベンヤミンもまた時代の大きな徴候とみなしていた（道籏泰三『墜ちゆく者たちの反転――ベンヤミンの「非人間」によせて』等）。表現主義文学に現れた現実崩壊の感覚、時代に蔓延する「破壊的性格」等、二十世紀芸術において顕著になった非人間化の傾向は、このようにさまざまな角度から検討されてきた。しかし、それがフランス近代詩において明確になった非人格化･非人間化の過程とどのように関係するかは、まだ精査されていない。

われわれが芸術の非人間化という概念に行き当たったのは、フランス近代文学における散文の検討を進める過程においてだった。ロマン主義以降、散文はそれ以前の文学になかった特別な地位を獲得するようになった。この点については、ルカーチ『小説の理論』（一九二〇年）、ベンヤミン『ドイツ･ロマン主義における芸術批評の概念』（一九二〇年）など）等の古典的な研究がすでに明らかにしている。そこには、十九世紀半ばのボードレール以降のフランス近代詩において顕著になった非人間化の傾向が深く関わっているのではないかという疑問が、本研究の出発点となった。ランボーの「私は一個の他者だ」、マラルメの「発話者としての詩人の消滅」等の言葉が典型的に示しているように、抒情の言葉はもはや実在人物の心情から発生するのではなく、非人格化の過程で模索されるようになる。この作者と言葉の分離という現象は、散文詩というジャンルを生みだしただけでなく、ヴァレリー、カミュ、クロード･シモン等、二十世紀の作家たちの散文にも広く見られる。ではフランス近代文学の散文において、非人間化という傾向は実際にはどのような形で展開されたのだろうか。

この課題に、本研究は、まず文学における語りの問題、とりわけ語りにおける声の問題を深めてゆくことによって取り組もうとした。「近代フランス文学における散文の研究」（基盤研究(C)、2013-2015）において、文学と声に関する研究を始め、その成果を論文集の形でまとめることが最初の目標としてあったためである。近代文学は、テクノロジーの進展による知覚の変化によって大きな影響を受けてきた。とりわけ声をめぐるテクノロジー（電話、無線、ラジオ、オーディオ）の進展は、言葉によって表象される世界に根本的な変化をもたらした。ここでわれわれを困惑させたのは、技術の進展によって、実際には非人称の声、誰の者でもない声の役割が拡大してきたことである。この現象を、近代抒情詩の詩人たちが追究してきた非人格化･非人間化の過程と関係づけることで、フランス二十世紀文学のひとつの本質的な特徴を明らかにできるのではないか。この疑問を押し進めながら、二十世紀文学のより包括的な特質を解明することが大きな目標となった。

２．研究の目的

「非人間の詩学」と名づけたひとつの文学潮流を解明することで、二十世紀フランス文学を再考することを目指した。十九世紀に黄金期を迎えた小説・抒情詩・演劇というカテゴリーにしたがって、この時代に書かれた文学を記述することはできない。それらの形式は解体され、再構築され、衰退していったが、だからといって書くという行為そのものが衰えたわけではない。ではこの時代の文学はどのような形で展開されたのか。この疑問に、非人間化の過程が書くという行為のうちにどのように捉えられているのか、さらにそこから新しい人間像がどのように生成しているのかを追究することで答えることが本研究の目的である。

３．研究の方法

文学研究の基本は、文献調査とテクストの読解以外にはない。目の前のテクストをどのように読み、他のどのようなテクストに接続できるかを考えることで、この方法には無限の発見可能性がふくまれていることを実感できる。そのためには、どのような文献がわれわれの研究にとって重要なのか、それを読み解くどのような視点が考えられるのかをめぐって、さまざまな研究者と情報を交換することが、もっとも重要なステップとなる。研究代表者は、「ヴァレリーにおける詩と芸術」(日仏会館、三浦信孝氏との共同研究、2017.10.21-22)、「メルロ･ポンティはヴァレリーをどう読んだのか？――1953 年コレージュ･ド･フランス講義「言語の文学的使用の探究」をめぐって」（東京大学文学部、2019.3.27）等の国際研究集会を開催、また「ポール･ヴァレリーと科学」（ヴァレリー文学館、セット、2016.9.23-25）、「ブルトン後のブルトン――シュルレアリスムの哲学」（フランス国立図書館、パリ、2017.4.26-27）、「世界文学から見たフランス語圏カリブ海――ネグリチュードから群島的思考へ――」（日仏会館、2018.3.25-26）等の国際研究集会、「20 世紀フランス文学における夢」（日本フランス語フランス文学会関東支部シンポジウム、東京外語大学、2017.3.4）等の国内の研究集会に参加、本研究の課題に関する視野を広げることができた。

４．研究成果

〈声〉をめぐる研究、眠りと覚醒の境界をめぐる研究、そしてヴァレリーの詩学に関する研究で一定の成果を上げることができた。

『声と文学――拡張する身体の誘惑』（鈴木雅雄氏との共編著、平凡社）に結実した共同研究では、近代文学がさまざまなテクノロジーによる知覚の変化によって影響されてきた過程を跡づけることができた。映像（写真、映画、テレビ、漫画）、移動手段（車、列車、飛行機）と並んで、声をめぐるテクノロジー（電話、無線、ラジオ、オーディオ）の進展は、言葉によって表象される世界に根本的な変化をもたらした。「初音ミク」に代表されるボーカロイド（音声合

成技術）は、百年前から顕著になってきた音声テクノロジーの延長上にあり、この技術について考察することはそのままこの百年の文学における声の問題を考えることにつながる。そこで明らかになったのは、身体そのものであるはずの〈声〉が発話者の身体、さらにはその主体から切り離すことができるということである。〈声〉は主体と分離できるというこの非人間の詩学をめぐる観察は、フランス近代抒情詩からフランス二十世紀の散文への展開と結びつけるうえで重要な役割を果たすものと思われる。

また、夢と覚醒という、個人のなかで人格の意識がゆらぐ状態に着目、「放心の幾何学」と題する一連の論考に取り組み、とりわけヴァレリー、プルースト、ブルトン、サルトル、バルトにおける非人間の詩学について研究した。目覚め際の自分が誰なのかわからない、すぐに消える儚い瞬間に、これらの作家が汲み尽くせない言葉の源泉を見出していたことが明らかになった。意識が目覚めつつあるのに、自分が誰なのか、どこにいるのかはっきりしない半覚半醒の状態は、他の近現代作家にも見られる重要なモチーフである。以上の論考は『目覚めたまま見る夢――二十世紀フランス文学序説』（岩波書店）と題された単著として刊行された。研究分担者の野崎歓氏も『夢の共有』（岩波書店）を出版、十九世紀文学から現在の映画にいたるまで、夢の詩学が大きな役割を果たしていることを証明した。

最後に、研究代表者が専門としているヴァレリー研究において、『ヴァレリーにおける詩と芸術』（三浦信孝氏との共編著、水声社）という論文集を刊行した。ヴァレリーはものを作る過程をどこまで明晰に意識できるのかを追究、「制作学」と呼ばれる独自の詩学の道を切り開いた。ヴァレリーの制作学においては、個人の力、人間の力を超えたものと、個人の意識が繰り広げる複雑な葛藤が大きな役割を果たしている。ヴァレリーはこの非人間の詩学が、絵画、建築、舞踏、演劇、写真等の領域においても重要な役割を果たしていることを強調した。非人間の詩学は、単に人格崩壊の過程なのではなく、新たに配置され直された現実を構築する、きわめて生産的な詩学だったのである。

これらの主題論的研究は、もはや人間的事実というフィクションを中心に据えて文学空間を構築することができず、現実崩壊の感覚を取りいれながら新たな世界構築の方向を模索する文学の姿を浮き彫りにしている。そこでは主体が経験を剥奪され、それを言語化できないという状況そのものが大きな問題となっていたことがわかった。だが、そこには確実に新たな現実構築への道筋がふくまれている。その道筋をより鮮明にすることが今後の課題となるだろう。

さらに主題論的な研究の限界を超え、より大きな問題の解明が必要であることが明確になった。二十世紀文学が、全体としてどのような姿をしているのかという問題である。先に述べた通り、十九世紀に黄金期を迎えた小説・抒情詩・演劇というカテゴリーでは、この時代に書かれた文学全体の姿を記述することはできない。ではどのような視点から見れば、この時代の文学全体の姿を捉えることができるのか。非人間の詩学の探究は、近代文学において散文が果たした役割をより深く理解するための入口にすぎない。今回の研究を通して、二十世紀文学において、主観的な感覚と、その感覚が失われるぎりぎりの境界が大きなモチーフとなっていることが明らかになった。言い換えれば、自己に固有のものと思われていたものが失われていくという認識と、それとは逆に、〈私〉の身に起こることは確かにひとつの現実であり、それを通してしか何も始まらないという認識という二つの相反する力線が、この時代の文学の大きな特質となっている。この視点を、今後は小説・抒情詩・演劇に限らず、人文科学の作品にも適応可能なのかどうかを検討することで、二十世紀文学に関するより包括的な視野を築くことを目指したい。二十世紀という時代において、経験の条件がどのように変化したのかを記述することが、今後の課題である。非人間の詩学を研究することで、そのような展望が得られたことも、ひとつの成果として記しておきたい。

５．主な発表論文等

① 塚本昌則、「放心の幾何学――二〇世紀フランス文学における眠りと夢 (5)――イメージにおける眠りと覚醒――サルトルとバルトをめぐって」、『思想』、2018 年 6 月号 (n.1130)、p.116-137

② Yoshikazu Nakaji, « "Mon sort dépend de ce livre" : vie et art dans *Une saison en enfer* », dans *Les Saisons de Rimbaud*, textes réunis par Olivier Bivort, André Guyaux, Michel Murat et Yoshikazu Nakaji, Classiques Garnier, 2018 (à paraître)

③ 中地義和、「韻文口語訳の音楽――ランボー「陶酔の船」*Le Bateau ivre* を例に」、『翻訳家たちの挑戦　日仏から世界文学へ』、水声社（近刊）、p.223-248.

④ 中地義和、「ル･クレジオと詩的なもの」、『現代詩手帖』、思潮社、2018 年 10 月号、p.157-159

⑤ 野崎歓、『文学批評への招待』、丹治愛･山田広昭編、放送大学教育振興会／NHK 出版、2018 年 3 月、289p、「4　小説の分析」p.70-86、「5　映画の分析」p.87-101

⑥ Masanori Tsukamoto, « Dessin et rêve chez Valéry — autour de *Degas Danse Dessin* », *Degas Danse Dessin : Hommage à Degas avec Paul Valéry,* Musée d'Orsay / Gallimard, 2017, p.58-65

⑦ Masanori Tsukamoto, « Valéry et Proust : Deux poétiques du rêve », *Valéry et les sciences,* Fata Morgana / Musée Paul Valéry, 2017, p.51-74

⑧ 塚本昌則、「放心の幾何学――20 世紀フランス文学における眠りと夢 (4)――」、『思想』、2017 年 9 月号（n.1121）、p.83-105

⑨ 塚本昌則、「放心の幾何学――20 世紀フランス文学における眠りと夢 (3)――」、『思想』、2017 年 3 月号（n.1115）、p.93-114

⑩ Masanori Tsukamoto, « La photographie dans l'œuvre critique de Valéry », *Textimage*, n° 8 : Poésie et image à la croisée des supports, Hiver 2017, http://revue-textimage.com/13_poesie_image/tsukamoto1.html

⑪ 野崎歓、「フランス文学から映画へ――ロベール・ブレッソンの場合」、小川公代・村田真一・吉村和明編『文学とアダプテーション――ヨーロッパの文化的変容』、春風社、2017 年 10 月 17 日、p.35-60

⑫ 野崎歓、『エドワード・ヤン――再見・再考』、フィルムアート社、2017 年 8 月、「『ヤンヤン　夏の想い出』――エドワード・ヤンと小柄な男児の秘密」、p.226-236

⑬ 野崎歓、「歌声と回想――ルソー、シャトーブリアン、ネルヴァル」、塚本昌則・鈴木雅雄編『声と文学――拡張する身体の誘惑』、平凡社、2017 年、3 月 24 日、p.256-275

⑭ Kan Nozaki, « Gérard de Nerval et le partage du rêve », *Revue Nerval*, Classique Garnier, nº.1, mars 2017, p.43-58

⑮ 塚本昌則、「放心の幾何学――20 世紀フランス文学における眠りと夢 (2)――」、『思想』、2016 年 12 月号（n.1112）、p.110-132

⑯ 塚本昌則、「放心の幾何学――20 世紀フランス文学における眠りと夢 (1)――」、『思想』、2016 年 8 月号 (n.1108)、p.78-96

⑰ 中地義和、「二重の肖像」、『書簡の時代――ロラン・バルト晩年の肖像』、みすず書房、2016 年、pp.194-211.

〔学会発表〕（計２２件）

① Masanori Tsukamoto, « Qu'est-ce que "l'usage littéraire du langage"? — La parole à l'état naissant chez Valéry et chez Merleau-Ponty », 国際研究集会« Merleau-Ponty devant Valéry — le cours au Collège de France en 1953 : "Recherches sur l'usage littéraire du langage" »での発表、東京大学文学部、2019.3.27

② Masanori Tsukamoto, « Le support de la lumière : une théorie virtuelle du cinéma chez Valéry », 国際研究集会« Le cinéma des poètes » での発表、東京大学文学部、2018.12.15

③ 塚本昌則、「クレオール文学をどう訳すか」、早稲田大学・現代フランス研究所、日仏会館・フランス国立日本研究所主催　国際シンポジウム『世界文学から見たフランス語圏カリブ海――ネグリチュードから群島的思考へ――』（2018.3.25-26）、日仏会館、2018.3.26

④ 中地義和、「ランボーの絶えざる脱皮について」、日仏教養講座（日仏会館）、2019.2.12, 2.19, 2.26, 3.5

⑤ 中地義和、「詩を訳す――忠実さと創意（Traduire la poésie : fidélité et invention）」、国際シンポジウム「世界文学の可能性――日仏翻訳の遠近法」、日仏会館、2018.4.14

⑥ 野崎歓、「『驚異』のフランス文化――童話から映画へ」（講演）、白百合女子大学言語・文学センター、2019.1.21

⑦ 野崎歓、「野崎歓のフランス文学案内　バルザック『ゴプセック』」（講演）、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.1.15

⑧ 野崎歓、「フランス小説の光と影　カミュ『ペスト』」（講演）、NHK 文化センター青山教室、2018.12.3

⑨ 野崎歓、公開セミナー「新訳でプルーストを読破する　第 8 回『ソドムとゴモラ』I」、立教大学、2018.12.1

⑩ 野崎歓、「フランス文学から映画へ――ジャック・ドゥミ『ロバと王女』をめぐって」（講演）、上智大学ヨーロッパ研究所、2018.11.20

⑪ 野崎歓、「翻訳すなわち創造」、シンポジウム「翻訳と文化」明治大学大学院教養デザイン研究科主催、2018.11.17

⑫ 塚本昌則、「シミュレーションの詩学―ヴァレリーにおける身体の変容」、日仏会館・フランス国立日本研究所主催・国際シンポジウム『芸術照応の魅惑 III ヴァレリーにおける詩と芸術』(2017.10.21-22)での発表、日仏会館、2017.10.21

⑬ Masanori Tsukamoto, « Breton au Japon — une passivité créatrice », 国際研究集会« Breton après Breton (1966-2016) : Philosophies du surréalisme » (2017.4.26-27)での発表、Bibliothèque Nationale de France (Paris, France), 2017.4.26

⑭ 塚本昌則、「ロラン・バルトにおける眠りと覚醒――〈中性的なもの〉をめぐって」、日本フランス語フランス文学会関東支部 2016 年度大会シンポジウム「20 世紀フランス文学における夢」での発表、東京外語大学、2017.3.4

⑮ Yoshikazu Nakaji, « Le Clézio et la culture japonaise », Colloque international *Le Clézio et l'Asie*, les 9 et 10 octobre 2017, 南京大学（中国）

⑯ Yoshikazu Nakaji, « Roland Barthes au Japon »、講演、ジュネーヴ大学、2017.4.11

⑰ Yoshikazu Nakaji, « La poème en prose et le narratif : *Illuminations* », 国際研究集会 « Narration et invention en littérature et cinéma »での発表、ジュネーヴ大学、2017.3.24

⑱ Yoshikazu Nakaji, « "Mon sort dépend de ce livre" : vie et art dans *Une saison en enfer* » 講演、パリ・ソルボンヌ大学、2017.3.22

⑲ Yoshikazu Nakaji, 国際研究集会 « Les saisons de Rimbaud »の共同企画運営、司会および報告 « Sur une traduction d'*Une saison en enfer* au Japon »、パリ・ソルボンヌ大学、2017.3.16-17

⑳ 塚本昌則、「ローデンバックの写真小説」、日白修好 150 周年記念シンポジウム実行委員会主催『文化・知の多層性と越境性へのまなざし――学際的交流と「ベルギー学」の構築をめざして』(2016.12.10-11)での発表、東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎、2016.12.10

㉑ Masanori Tsukamoto, « Valéry et Proust — deux poétiques du rêve », Musée Paul Valéry (Montpellier, France)での国際研究集会 « Paul Valéry et les sciences » (2016.9.23-25)での発表、2016.9.25

㉒ Yoshikazu Nakaji, « Les inventions d'inconnu : Rimbaud face à Baudelaire », Cycle de quatre cours, Collège de France（**コレージュ・ド・フランス 4 回連続講義）、**2016.4.6, 4.13, 5.4, 5.11

〔図書〕（計7件）

① 塚本昌則、『目覚めたまま見る夢――20 世紀フランス文学序説』、岩波書店、2019.2、244p.

② 野崎歓、『ヨーロッパ文学の読み方――近代篇』（沼野充義との共編著）、放送大学教育振興会、2019 年、260p.

③ 塚本昌則（三浦信孝との共編著）、『ヴァレリーにおける詩と芸術』（三浦信孝との共編著）、水声社、2018.8、362p.

④ 野崎歓、『水の匂いがするようだ――井伏鱒二のほうへ』、集英社、2018 年、283p.

⑤ 野崎歓（編著）、『フランス文学を旅する 60 章』、明石書店、2018 年、366p.

⑥ 塚本昌則（鈴木雅雄との共編著）、『声と文学――拡張する身体の誘惑』（鈴木雅雄との共編著）、平

凡社、2017.3、584p.

⑦ 野崎歓、『夢の共有――文学と翻訳と映画のはざまで』、岩波書店、2016 年 11 月 29 日、212p.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

中地　義和（Nakaji Yoshikazu）
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50188942

野崎　歓（Nozaki Kan）
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：60218310

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。